Japanese Association for Religious Studies

することにつながるのではないか。

私たち日本人にとって、表層的には道教はまったくの他者であることはまちがいない。一方で、儒教は倫理規範として日本人のメンタリティーに浸透していたと、少なくとも昔はそう信じられていた。ここには実は大きな見落としがある。戦前どころか江戸時代このかた、私たちは儒教を宗教とは捉えてこなかった。社会規範や生活倫理、あるいは政治思想としての側面をもっぱら取り入れてきた。実際には先祖祭祀や葬墓制など、むしろ宗教にとって本質に関わるものを日本人も取り入れなかったわけではない。そういう視点からの研究も最近は行なわれるようになってきた。宗教としての儒教に目を向けていくことは大きな可能性として残されているだろう。これは今後の中国宗教研究の課題の一つではないかと考えられる。

戦前日本における仏教研究

下田正弘

長い歴史をかかえる戦前の仏教研究を概観するさい、時代の流れに沿って時期をいくつかに画期し、その間に認められる差異の記述をなすのが一般的であろう。じっさいこの試みは近年、末木文美士（『近代日本と仏教』トランスビュー、二〇〇四年）により、東京(帝国)大学の印度哲学講座を対象として二期に区分してなされ、有益な見取り図が提供されている。ただこうした研究史の叙述は、未熟な古い時代を開明的な次世代が乗り越えてゆくという、直線的な進歩史観を呈しがちな点には注意がいる。研究史叙述の意義は、複層的な過去の蓄積によって成り立つ現在が胚胎する諸問題を、過去を記述し直すことによって顕在化させ、それをとおして未来を開くべき指針となす点にある。この目的のためには時系列による叙述を離れ、その時々に優勢となった態度を見きわめ、それによって解決された課題と見えなくなった課題とを個々に明かしてゆくことが必要だろう。

日本の仏教学者たちにとって全く未知であった近代仏教学を零から立ち上げた戦前七〇年の研究の成果と、その基礎に立ちつつ先行研究を批判的に深化させた戦後の七〇年の成果とを比較したとき、そこにはきわだった差異が存在する。明治維新より半世紀、西洋思想と対峙しつつ厳しい緊張関係のもとに仏教を研究対象としつづけていた戦前の学界においては、仏教の全体像を希求し、一つの精神的態度を要請する存在としてそれを描き出そうとする意欲が強かった。ところが敗戦（あるいは「民主化」）によって欧米との対立が不要となると、仏教を一つの存在として樹立させるべき呪縛から解放され、その意欲は学界から急速に後退し、それに代わって仏教を社会的諸要素から構成される文化現象として理解する傾向が強固となった。研究の関心は各要素の考察に個別に当てられ、それらが相互にいかに関係し、仏教という全体をどう構成しているかという問いは、多くの場合に不問に付された。この変化にともなって実存的、哲学的な課題を仏教において問おうとする態度は学界から

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

はほとんど消滅したように思う。

戦前と戦後のこの傾向の相違は、学問の成果の発信形態にも現れている。戦前の仏教学界においては、大日本続蔵経、大正新脩大蔵経、国訳大蔵経、国訳一切経、南伝大蔵経、チベット大蔵経など、じつに十指におよぶ「大蔵経」が編纂、あるいは招来されている。印刷文化の隆盛という課題でも注目すべきこの現象は、研究者たちの関心が仏教全体像の把握と表出に強く方向づけられていたことを物語っている。前田慧雲、高楠順次郎、木村泰賢など、当時の学界のリーダーたちがこぞって大蔵経の編纂に向かうのは、開かれた場に仏教全体をすえ置こうとする意欲の表れだろう。それに対して戦後の研究成果の発信は、個々には精緻な仕上がりではあるものの、スッタニパータやダンマパダなど、これら全集のなかからほんの一部を取り出し、仏教全体のイメージに代替させようとするものが目立っている。これらの成果は一個人の全集あるいは著作集としてまとめられ、そこに個人の名を冠した仏教学の名が、例えば中村仏教学、平川仏教学などとして、周囲から付与される点にも注意がいる。相互の整合的には必ずしも関心が払われないまま、細分化され、断片化された業績の集成が、個人の名において統合されて「学」の名が付与されるという、海外はもとより、戦前の日本でも現れたことのないこの特異な現象には、仏教の全体像を描く営みから退き、諸要素に断片化したことで、部分を即全体とし、個をそのまま公とするしか方途のなくなった、戦後日本の仏教学の特色が映しだされている。

戦前日本におけるキリスト教研究

芦名定道

この発題の目的は、「戦前日本におけるキリスト教研究」を概観し、その現代的意義について若干の指摘を行うことである。まず概観に先立って確認したいのは、「戦前日本」ということで問題となる開国（一八五九年）から敗戦（一九四五年）までのキリスト教研究を担った研究者について、次の三つの世代を区分することができることである。第一世代は、明治期のキリスト教思想を担った、海老名弾正、植村正久、内村鑑三、小崎弘道などのキリスト教指導者たちの世代であり、ここにキリスト教研究の発端を確認することができる。また、第二世代は、波多野精一や石原謙らからはじまり、有賀鐵太郎に至る、大正から昭和に活躍する世代である。それに対して、第三世代の研究者は、戦後にその主たる研究活動を開始し、戦後のキリスト教思想を担った世代であって、この点から判断して、本発題の範囲からは除外される（したがって、一九四六年の北森嘉蔵『神の痛みの神学』はここでは扱わない）。

最初期のキリスト教研究は、植村、内村、海老名、小崎などの第一世代のキリスト教指導者たちによって担われた。その発端には、宣教師が伝えたキリスト教思想が存在するが――伝統的で保守的な神学あるいは素朴な信仰――、こうした伝えられたキリスト教思想は、これらの第一世代のキリスト教指導者に

NII-Electronic Library Service